

小田原史談

第 134 号

発行所 小田原史談会
小田原市南町 2-3-21



透谷の生家と『民衆』同人

前列右 福田正夫 後列中央 井上康文
『民衆』第五号(大正七年五月刊)より
(小田原図書館蔵)

北村透谷生誕地



透谷を憶ふ

田熊保行

眞實に生きなむとして身も悶へ
心一途に死せる君かや

ずるずるに只生きてゐる大方の
中に一入尊くもあるか

現世に身をば殺して永久の
命たどりし心いつくし

永久の命なりけり現世に
はかなく生くる身はかなしけれ

即ち明治文壇の先驅者として失へる
命がやがて甦りきぬ

雄々しくも若き戦士の佛を
君にしぬびて心をどりぬ

名を刻む石こそあらね箱根山
山の麓に生れし透谷

透谷の生れし家の前にならび
寫眞にとると顔晒しけり

眞實に心足らはぬ苦しみを
苦しみつめて更に生きなむ

× × × × ×

及ばざる凡てを捨て、いや更に
生きなむとするわれと苦しく

『民衆』第五号に所載

北村透谷 生誕百二十年を迎えて

高田喜久三

今年、昭和六十三年は明治百二十年である。慶応四年すなわち明治元年に生まれた北村透谷も生誕百二十年を迎える訳である。小田原に住む人で透谷の名を知らぬ人は少ないが、彼がどんな生き方をし、どんな事績を遺したかを詳しく知る人は決して多くはない。わずかに二十五年余の生涯の中で、情熱と苦悩と挫折をめぐまるとしく体験しながら、今に残る不朽の足跡をわれわれに遺して行った小田原出身の北村透谷をここに再び取り上げて考えて見ることは決して無駄なことではない。

北村透谷、本名門太郎は、明治元年十二月二十九日(当時の陰暦では十一月十六日)小田原藩医北村玄快の孫として小田原唐人町に生れた。彼が生れた明治元年すなわち慶応四年は、明治維新によって世の中が激変した時代である。彼の父快蔵も祖父玄快も、廢藩置縣によって武士を失業して生活の手段を失った。門太郎の幼少年時代が不安で激浪の中であった事は当然である。彼は明治十四年父母に伴はれて上京、泰明小学校に入学、この時すでに神童の誉れが高く、

その言動は校長を驚かせた。しかし、維新時における小田原大久保藩の不始末によって、小田原藩出身者は常に不遇を余儀なくされるという状況の中で、門太郎は小学校卒業後、各地の漢学塾に学ぶのだが、いづれにも満足出来ず、やがてノイローゼとなった彼を父は、その憔悴をいやすために旅に出してやった。これからのち門太郎が放浪の経験を重ねてゆくのもこれが第一歩であったのだ。その後親戚の男の紹介で神奈川県議会の給仕となり、政治の世界に深い関心を抱くに至る。

折りから明治政府は澎湃たる民衆の自由民権運動と対決して深刻な状況の中にあつた。年若くしかも情熱に燃えていた門太郎が、この民権運動の激流に呑み込まれたことは当然であった。彼はこの運動の中で、民権論者大矢正夫と、同じく民権論者で町田地方の実力者でもあつた石坂昌孝の長男公歴との二人に出会い交友を深めたのであつた。しかしある時、畏友大矢正夫から民権運動のテロ行動に誘われた門太郎は、さすが大きなショックを受け、一転して運動から退くことを決意したのである。

僅か十六歳で節操を折って深い挫折の谷間に陥ちこんだ彼は、懊惱の中で偶然にも石坂公歴の妹ミナとめぐりあい、彼女が信奉するキリスト教の教えと共に、彼女の愛をも獲得するのである。門太郎は宣教師の仕事を手伝いながら、文学の道へ進んでゆくのであつた。

やがて透谷とミナは自活の道もいまだ定かでないのにも拘らず結婚を強行した。明治二十一年十一月三日、透谷は十九歳、ミナは二十三歳であつた。彼らの結婚は両家の親も余り賛成せず、弥左エ門町の北村家で牧師田村直臣の司会で行われた結婚式には石坂家からはついに一人も出席しなかつたという。当然二人の結婚生活は決して華やかなものではなく、苦悩の深いものであつたにちがいない。そしてその苦悩の中から彼は第一作「楚囚之詩」を自費出版した。つづいて戯曲「蓬萊曲」を上梓。しかしこれらの書評は芳しくなかつた。もっとも明治のこの時代、文壇そのものがいまだ未成熟であつたのだから反響が少ないのも無理はない。今この二著を読むと固苦しい難しい漢語ばかりで決して成功したものとは言えない。しかしこの文中に、多くの詩を思わせる文章が散見すること、文章そのものがリズム感をもって躍動していることは彼が詩人としての感性を持っていることを証明する。この前後にも蝶や蛍を題材とした新体詩を作っていることから、一般には彼を詩人として評価しているであろう。

しかし透谷は単なる詩人ではない。その後の数多くの著作を見ると、その多くは評論であり、ある意味では哲学書とも受けとれるものが多い。西欧文化がどつと流入してその応対にいとまのなかつた明治の初期、透谷は瑞々しい感覚と犀利な推理をもって、永い封建制の中で逼塞していた日本人に、目の覚めるような新しい思想を構築して見せたのである。「厭世詩家と女性」においては恋愛を人間形成の槓桿と断じて世人を駭かした。又、「各人心宮内の秘宮」「内部生命論」では、はじめて「想世界」すなわち現代の吾々が言う処の形而上の分野を確然と浮き彫りにした。従来、日本人には昔から哲学思想がないと嘆じられていたが、透谷のこれらの評論は、日本に西欧哲学思想をもたらした嚆矢と言つても過言ではあるまい。

祖母北村ミナを憶う

堀越真一

(编者註)

堀越真一氏は北村透谷夫妻の孫で、透谷の一人娘英さんが堀越家に嫁してもうけた方です。このたび透谷生誕百二十年を迎えて透谷特集を編するに当って、貴重な原稿を頂戴しました。尚、堀越氏は当史談会の会員でもあります。

今年三月末のある日、突然私の家に、昔旧東京府立第八高女に勤務されていた野崎貞子先生

から電話を頂きました。「小田原高長寺の北村ミナ先生の墓参りをしたい」とのことでした。野崎先生はハワイの日系二世で、旧府立第八高女に透谷の妻ミナと共に勤務されていました。当時小学生であった私も先生を存じ上げておりました。そのような昔の知り合いが、いまだお元気で私の祖母ミナのことを覚えていられることに私は感動して、ご一緒に小田原の高長寺に二度目の墓参りを致しま

若き日の祖母



した。祖母ミナは慶応元年生まれです。昭和十七年に没するまで七十六年の生涯でした。

祖母ミナは東京三多摩の自由民権運動の指導者石坂昌孝の娘に生まれ、十八歳までは和漢学の日展塾に学び、後に横浜のミッシェンスクールに学び、透谷と結婚しました。透谷と死別五年後、ミナは三十四歳にして一子英子を透谷の母ユキに委ねて、生前の透谷と共に心から信頼していた宣教師ウッドウォルス夫妻に伴はれて渡米しました。そして在留邦人皆無で且つ南北戦争による奴隷解放五十年を経たばかりの人種差別の激しい米國東部のインディアナ州オハイオ州に住んで、自活しつつ学び、成績優秀で卒業のときには金時計を受賞、又、バチエラーオブアーツの称号を得て四十二歳で帰国しました。

帰国後は一子英子の他に実母ヤマ、後には妹トシの一家を引き取り、英語塾をひらいて生計を立てていました。やがてその後、開校して間もない豊島師範学校の英語教諭嘱託を兼ねていましたが、大正十二年に至り東京府立品川高女の専任教諭を拝命、昭和十二年七十二歳に至るまで勤務いたしました。

豊島師範在勤中は英語塾を経営しながらも、下宿生を多く置き、後にハワイ大学に勤めた園

最晩年の祖母



友忠夫氏もその一人であります。国友氏はのちに露語にも堪能になっていきます。ミナはギリシャ語を教えたこともあった様です。昭和四年頃、独乙の飛行船ツェッペリンが世界一周の途上日本に飛来した時には、土浦まで見物に行っているなど、今から思うと好奇心の旺盛な女性でありました。

昭和六年満州事変が勃発した頃、ミナはその日記に「支那の勢ひの背後には米國のあと押しがあるように想像さるる」と書いていますが、昭和十六年日米開戦の時には「敵を知らずして米國と戦うことの危惧」を深く心配していた様でした。

姑の北村ユキとミナ、透谷とミナ、娘英子とミナ、家族との間にはそれぞれ意見の違い、考え方の相違がありました。ミナの学業成績はまことに優秀でありました。唯、家事は不得手で余り好きでなかったようでしたが、国際感覚はすぐれており、その時代感覚は正しいものでありました。

思えばミナの生きた時代はまことに激動のくり返しでありました。そんな激変の時代の中にあって、彼女は女性としては先駆的且つ大胆な生きざまを生きた女性の一人であったと今でも思っております。

二宮尊徳翁

北村透谷

尊徳翁は余が郷里の人なり。曾つて之を一父老に聞くと、われ昔甚だ窮乏せる時金次郎我が為に致富の道を授けたるを以て今日の楽境に達したるなりと。金次郎生るるに一塊の領土なく死するにも亦た富米を以て去らざりし。荒蕪廢滅せる田墟を拓いて鋤犁其肩を離れず、其間に窮孤衰老を扶助するが為めに寒宵宵入つて眠る事を忘れ、其肘裡(腕)夙に「ず」と以前から既に一村の安危を負ふ所の者は高く既に一國を負ふの忍耐と度量を備へたり。其終生の事業は一太夫の家を整へ、某々邑の財務に當り、某藩の問ひに顧みたる等に過ぎず。而して彼が此小事に當るを見れば、再三固辭するの後、甚しきは辭する事幾有年に亘り、而して後妻子と離盃を挙げて出づ、辭する時は羊の如く法にして、出る時は驟然猛獅の奮迅するが如し。業に當るや孜孜宮々落葉をだも地に委せずと言ふ。其野州にあるや、同僚の武士、

彼が匹夫より出で君主の抜用する所となるを嫉みて、百万障碑を試む、而して翁の為す所は、彼輩が為めに特に酒肉を購ひ唯だ沈酔せしめて、其隙に事業の功を進めたりと言ふ。翁の苦慮察す可きなり。故小山春山余に語れる事あり、(春山は幼時翁に野州に従ひ居たりし人)翁は書を以て講ぜず、古人に随つて遊ばず、説くところ談するところ一々其胸臆より発すと。春山又た駿遠に遊びしことあり、該地に於ける報徳社なるもの、盛況宛然(さながら)たる一神社にして、而して偶像を有せざる者なりと。尊徳翁苦学して略ぼ学道に通ずるに至りしかども、未だ以て儒学の一家を成すに足らざりし。彼深く信仰を抱きしかども、未だ以て宗教家たるに至らざりし。彼が懐抱せし信仰は蓋し經典の文字を通じて來らず、其の眞摯、着實、清廉、勇猛なる天資が軼軻嶠嶠(車が行きなやむけわしい山路のような)たる人生の行路

に遭ひて、恰も奇代の名琴が烈々たる荒颯(強風)に撥かれて自然に逸韻妙響(みやびやかな妙な音)を發し、聴かるゝ事なく、稱せらるゝことなく、自ら鳴いて自ら絶えたるが如きなるか。斯くの如きは實に天來の朴直なる信仰にあらざるか。釋氏を説かず、神道を談せざる尊徳翁は、堅く天地の善美、人心の調和を進みては人界に天國を來する極意を自信したりし人なり、故に其温顔、微笑の中に精妙なる眞理をあらはし、俚談簡語、既に人心を觸むる事を得たり。豈炎々たる心中、火あるにあらずして能く斯の如きを得んや。彼は自ら信するの外、一點の自らを高むる所あらざりき、英雄を夢み、講壇を想ひ、邦土を欲し、聲譽を希ふの徒は、翁の眼前に局促たる(ちっぽけな)江舸(川舟)の如し、昨日凍饑に瀕したる小民の今日綿衣を着くるを見る時に、翁は満腔(満身)の涙を灑ぎて感謝したるなり、神を知らざる世と言ふ勿れ、翁の如きは感謝す可き目的物を信じ居たるは明らかなり。死者を送る翁は、天國に歸る人を歡送する今日の牧師に譲らざりし。生者を撫育せんとするの熱情も、安んぞ今日の宗教家に遜る所あら

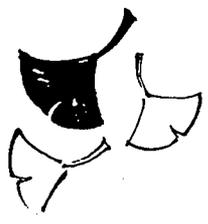
(解 説)

透谷の評論のなかから、「二宮尊徳翁」を採りあげてみた。明治二十四年(一八九一)十一月刊の『女子雜誌』に掲載されたものである。この年は、尊徳が従四位の贈位を受け、これを機に福住正兄等が報徳二宮神社創立を率先請願して、許可された年でもある。ときに透谷二十三歳、この年輩で、よくぞこれ程の評論を、と言いたくなる。透谷研究家の勝本清一郎は、この作品について「小田原出身者たる意識とともに、すでにフレンド派思想の反映がある」と指摘している。

「彼は非常に速筆であった。行動的にもなかなか働きのものではなかった。今日であつたら原稿料だけでも相当な額に達して、むしろ生活力の強い文学者のタイプに属するものであつたが、彼が生活に恵まれなかつたのは時代の罪だったのである」と、評している。

(澄)

フレンド派とは、別名クエーカー派。十七世紀イギリスの宗教家G・フォックスが創始したキリスト教一派で、反戦、徴兵忌避で著名。心の内にキリストを受け入れ、教会では、洗礼も聖餐も行わず、また礼拝儀式的順序



北村透谷と交友のあった

紅蓮洞 坂本易徳 (一)

その挫折の人生

岡部 忠 夫

北村透谷について調べているうちに、坂本易徳が透谷と交友があったのを知ることになって改めて易徳に関心を持つようになった。だが、彼の号と名前だけは、ずっと以前から知っていた。私の先祖の墓と、彼の墓が小田原市一丁田の宝安寺に在るためだ。

彼の墓石は並のものとは違っている。自然石を台石にして、高さ九十センチメートルの根府川石に

紅蓮洞 坂本易徳之墓

と刻まれ、戒名は記されていない。彼の名前を覚えていたのは、紅蓮洞という号のためだったかもしれない。初めて、この墓標に気づいたのは、中学四、五年の頃だったと思う。今から五十年あまりも前のことになる。

どうも変てこな号だな、と感じながら、私は、墓の主は大酒飲みでなかつたのかと、紅蓮洞の三文字から真赤になった顔を

思い浮べていた。また、そんな連想と共にかすかな反発を感じていた。

——今になって考えてみると、世に知られた人でもないのに、並の角柱とは違った形の墓石に、戒名なしに、自分の号と名前を記すとは、と。青年前期の自我のもたげが、自己存在の証を死後の世界にまで持ちこんでいるという感じを誘って、周囲の各家の墓石との違いに、ちよっぴり反発した感情を持ったのかも

しれない。ところが、改めて墓石を調べてみると、決して強烈な自己存在の主張をしたものでないことを改めて知ったのである。

墓標の表側には、号と姓の右脇に、「慶応二年九月廿四日相州小田原二生レ、大正十四年十二月十六日東京聖路加病院ニ死ス」と記され、裏面には、「肝煎 小田原保勝会」とある。

その頃、私は裏面の文字を全く理解できなかったし、さりとてそれを調べてみようなどといった気持は、さらさら湧かなか

た。いずれにしても関心外のことであった。そして、長い歳月の経過で生没年月日が記されていることも忘れて、ただ、「紅蓮洞 坂本易徳」という文字だけが記憶に残っていたのである。

肝煎となった小田原保勝会ははじめ史跡保存、郷土史研究を目的に、明治三十七年(一九〇四)に創立され、やがては観光面にも力を入れ、昭和八年(一九三三)小田原振興会として発展的解消する迄、小田原の発展に寄与した、純然たる民間団体であった。

彼の墓標を小田原保勝会が中心となって立てるからには、なんらかの彼の功労を認めての上のことであろう。

ところが、坂本易徳の評価はあんまり芳しいものではない。川崎長太郎は、昭和十三年七月創刊の郷土誌『安思我里』に「小田原の生んだ作家・詩人」と題し、北村透谷や牧野信一らと共に、彼のことに触れている。

明治から大正にかけて文壇を徘徊した坂本紅蓮洞と云う人も小田原出身である。この仁は慶応を優秀な成績で卒業しながら、生涯一つの小説や何かを書くことなく、文士間などをごろついて終った為作家詩人の列に這入っていない

のであるが、その風貌や変わった世捨人のような生活振りは佐藤春夫氏の「都会の憂鬱」に書かれている。紅蓮洞老人が春夫氏に電車賃を借りるくだりなど出てくる。紅蓮洞はグレルに通ずるのであろう。非常に変わった人間であつたらしい。そんな奇妙な人を出したというのも小田原の一特色であろう。古い文化の堆積の中からふと一輪顔を見せた狂い咲きも亦風情なしとしない。

佐藤春夫の「都会の憂鬱」(大正十一年一一九二発表)の中には「ゴトさん」という名で、晩年の彼が点描されているが、得体のしれぬ不思議な人物として捉え、そのうらぶれた、わびしい姿が描かれている。

……この男の紺の袷にハンティングを着ている老書生のような風采からその年齢を推すことは難しかった。……中略……ゴトさんは文学に志している学生たちの集合のなかへよく無断で這入って来た。それから毒のない悪罵で文壇人たちを一蹴し去るような口調を青年たちは別に邪魔にはしていなかった。ゴトさんは恰も正当な権利のような顔つきをして屢々彼等から小遣銭を徴集した。ゴトさんはただ「電車賃！」と言って手を突き出して人々が出そ

うが出すまいが同じ表情でその怪偉な顔つきを頷いて見せた。



次に『日本近代文学大辞典』第二巻(昭和五十二年十一月講談社発行)を見ると、次のように収録されている。

慶応二年九月?大正十四年十二月十六日(一九三三)

郷土関係の刊行物

昭和63年1月～6月
小田原図書館並びに市内3書店調査

- ◇佐倉東郊句集 雨だれ B 5 変形 147p
別冊 現代小田原俳壇賞之書
佐倉東郊著 B 5 変型 56p
佐倉東郊句集出版委員会発行
- ◇神奈川県立小田原中学校
第33回卒業50周年記念誌
B 5 版 112p
- ◇フェニックスに聴く 小田原
城内高校PTA史
同刊行会編 A 5 版 357p
- ◇報徳集書解説目録
二宮尊徳生誕200年記念出版
小田原図書館編集・発行
A 5 版 154p
- ◇小田原城三の丸・大外郭
小田原市教育委員会発行
B 5 43p ¥600
- ◇埋蔵文化財発掘調査報告調11
久野諏訪の原遺跡・高田宮町
遺跡 小田原市教育委員会発
行 B 5 版 30p ¥500
- ◇小田原郷土文化館研究報告24
自然科学No.12 B 5 67p
- ◇南足柄市史2 資料編近世(1)
南足柄市編集・発行
A 5 796p ¥5,000
- ◇箱根町文化財紀要18
箱根旧街道 箱根町教育委員
会発行 B 5 版 87p
- ◇上遺跡(箱根町宮城野)
上遺跡調査団発行 B 5 版
75p
- ◇慧春尼考
福田昌宏著 ぼる出版発行
B 6 版 157p ¥2,000
- ◇東北をいく 横浜銀行産業文
化財団編 西北社発行 星雲
社発売 A 5 版 120p
¥980
- ◇箱根の文学散歩 箱根文学研
究会編
神奈川新聞社発行 新書版
230p ¥920
- ◇鎌倉の中世史探訪『吾妻鏡』
を歩く 末広昌雄著 岳書房
発行 B 6 231p ¥1,700
- ◇『神奈川の古寺社縁起』
稲葉 博著
暁印書館発行 B 6 261p
¥1,500
- ◇箱根登山鉄道への招待——登
山鉄道の形成とその車輛
荒井文治著 鉄道図書刊行会
A 5 版 46p ¥850
- ◇箱根叢書 箱根細工物語——
漂泊と定住の木工芸 岩崎宗
純著 神奈川新聞社発行
新書版 196p ¥870
- ◇箱根叢書 箱根の逆さ杉
大木靖衛 袴田和夫 伊藤博
共著 神奈川新聞社発行
新書版 183p ¥920
- ◇後北条氏 鈴木良一著 有隣
堂刊 新書版 187p ¥880
- ◇小田原地方の漁業史
本多康弘著 B 6 版 255p
- ◇鈴木賞介全歌集
皆美社発行 A 5 変型
634p ¥10,000
- ◇梅香園を語る 藤見文恵著
A 5 版 271p
- ◇小さなグミの木 青木喜祐七
十八年の生涯 発行者 青木
コト(湯河原町) A 5 版
224p
- ◇ありとあらゆるアリの話
久保田政雄著(小田原市)
講談社発行 B 6 185p
¥1,300
- ◇菓面散布で無農薬めざす黒
砂糖・酢農法 早藤巖著(湯
河原町) 農山漁村文化協会
発行 B 6 193p ¥1,300
- ◇朝日ブックレット 田中昭二
教授が語る超伝導の衝撃(小
田原出身) 朝日新聞社発行
B 6 版 64p ¥280
- ◇海軍予備補修生物語 苦難に
満ちた工作兵 桜井光夫著
(真鶴町) リプロ藤沢店発
行 B 6 192p ¥1,200
(会報No.132 昭和62年7月～
12月分 調査洩れを含む)

雑文家 江戸生れ 本名易徳 慶応義塾に福沢桃介と同様に学び、中等教員、新聞記者を勤めたが永続しなかった。『江東町人言』(明治三十九年)を『明星』に発表するほか、『文壇立志篇』などがある。文学者と交わり、奇癖の逸話が多く、酒間に毒舌を弄する文壇名物男である。その雅号のようにのらくらと放浪生活に浮き身をやつし、窮乏のうちに死んだ。(瀬沼茂樹)

明治後期・大正期の雑文家。慶応二年九月江戸に生れる。本名は易徳。慶応義塾で福沢桃介と同期で学んだ。その後小田原町(小田原市)で中等学校の教員を勤めた。新聞記者と雑誌記者を経て文壇人となった。まとまった著述はなく、文壇と演劇の消息通として知られた。論説としては、一九〇六(明治元)年に『江東町人言』を『明星』に発表したほか、「文壇立志編」などがある。文学者と交わり、奇癖の逸話が多く、酒間に毒舌を弄する文壇の名物男であったが、放浪生活と窮乏のうちに、一九二五(大正一四)年十

二月十六日に没。墓所は小田原宝安寺(『函東会報告誌』)以上が坂本紅蓮洞についての大方の記述と思われるが、大正十一年、佐藤春夫が雑誌『婦人公論』に連載した「都会の憂鬱」の中の一挿話として描かれている彼の人物像が、ずっとあとを引いている感じである。しかし、彼を奇妙な人として簡単に片付けてしまうにはなにかさっぱりした気持ちにはなれない。

奇癖と映る彼の晩年の行動は、生きて行くため図太く開き直った姿勢でなくて、なんだろうか。貧窮のために、うらぶれて、精神的にすれ切った鈍麻した姿であるにしても、放浪生活が貧窮の原因ではない。「都会の憂鬱」で、彼が電車賃を求める件など他人に同情や哀れみを求めるような態度ではない。その心底には男の意地を通した姿がある。生活苦が引き金になって、自らの命を絶つ破目に追い込まれた北村透谷と対照的な彼の氣質を思い浮べない訳にはいかない。陽気で人から親しみを持たれるタイプのイメージが浮んでくる。

易徳の経歴については、彼は自分のことを記さなかったので、明らかでない点が多い。僅かに彼が「故北村透谷」と題した談話(明治三十九年歳第十号『明星』)で知られるが、その冒頭に、北村透谷と旧同藩人であると述べており、まず、旧小田原藩人であったことが知られる。(統)

粗稿

小田原とは
どういいう都市か(6)

石井富之助

- 内 容
- 一、北条時代の小田原(二二九号)
- 二、江戸時代の小田原(二二〇号)
- 三、明治時代の小田原(二二一、二二二号)
- 四、小田原駅開通から市制施行まで(二三三、二三四号)
- 五、終戦後の小田原(二三三、二三四号)
- 六、交通都市小田原(本号)

六、交通都市小田原

前章においてわたしは、小田原市がさまざまな都市的要素を併せ持っていて、際立った特色のない都市だということ述べた。

しかし、戦後四十年間の推移を見ると、総合的に発展をしてきた中で、たった一つだけ目立った伸展を示したものがあつた。それは交通都市として小田原の地位が高まってきたことである。

まず鉄道についてみれば、小田原駅は大正九年熱海線の一駅として開通以来年を追って発展してきたが、昭和三十九年十月東海道新幹線の停車駅となつてからは実に目覚ましい発展を遂げている。

わたしの手元に東京南鉄道管理局の昭和五十四年度営業成績という印刷物があるが、その中

の旅客収入順位表(一日平均)

を見てわたしはびっくりした。なんと小田原駅は一日二三、四四二、二〇〇円の収入をあげ、東京、横浜、新橋について第四位を占めているのである。

関東大震災によつて受けた損傷をいくらか改修はしたものの、大正九年開設当時の駅舎そのままの面影を伝えている。こんなちっぽけな駅がこのような成績を挙げているとは全く思いもしないことであつた。

次に乗車人員順位表を見ると、ここでは一日五三、四一九人で第十七位になっている。しかし、これは国鉄だけの数字であつて、これに小田急、箱根登山、大雄山の三私鉄を合わして乗降人員を算定すると二十二万人に達するのである。

また、小田原駅より東京方面行電車の運転回数をみると

東海道線	九〇
新幹線	八〇
小田急	一六一
計	三三一

で、大正九年の二二回と比較するとその増加振りにはまことに驚くべきものがある。

次に、駅前から発車する箱根登山、伊豆箱根、富士急行三社のバスの運行状況を見てみよう。箱根方面、湯河原方面、下管我、関本、松田方面と分れて発車するバスは一日約七百回に及んでいる。他の都市の数字を調べたわけではないが、これだけのバスの起点となつている駅はおそらく湘南にはないであろうと思ふ。

一方道路については逐年整備されつつあるが、小田原市都市計画課発行の「都市計画の概要」には幹線道路について次のように述べられている。

また国道一号線は、市街地の南部を横断して通り、東は二宮町西は箱根町に通じ、国道一三五号線は早川から湯河原・熱海を経て下田市に達している。近年これらの主要幹線に加え、高速自動車国道東海自動車道(東名高速)に接続する国道二七一号線(小田原厚木バイパス)国道二五五号線が整備された。

このほかに西湘バイパスが国

府津と風祭とを結ぶ自動車道路として海岸線にそつて走っている。これら幹線道路を通過する自動車台数については昭和五十五年の調査がある。

国道一号線	一五、七五台
国道二七一号線	一〇、八五
国道二五五号線	三、九五
西湘バイパス	二、一五

いずれも十二時間の交通量を示すものだが、これだけの数字をみても小田原の自動車交通量のいかに大きいかを知ることができるであろう。

このような交通の異数の発達は小田原が東西交通のネックになつており、ことに富士箱根伊豆国立公園の玄関口という位置にあるためであると考えられる。

市民に小田原は観光地かととくと一様にとまどいの色を現わすが、それでは観光基地かときくとほぼ肯定という顔色をする。昭和五十八年の延観光客数は

箱根	一、〇六、四六
湯河原	六、二六、二八〇
小田原	四、三六、六六五

となつており、このうち小田原に来る観光客は箱根湯河原と重複するものが相当であると

思うが、いずれにして

も膨大な数字で、その大部分は小田原を基地として、あるいは小田原を通過して各方面へ移動して行くのである。

小田原は江戸時代に東海道五十三次の中で的重要宿駅、すなわち交通の要衝であつたが、今やそれをはるかに上越す交通都市となつてきている。そして、それが小田原のまず考えなければならぬ特色だといつてよいと思うのである。

商工会議所あたりでは、これだけ箱根湯河原に観光客が来るのだから、これをもう少し小田原に食いこめる工夫はないだろうかといふ。

かつて渡辺紳一郎氏がアサヒグラフに小田原のことを小便都

小田原駅(昭和六十三年七月)



市だと書いた。箱根湯河原の客は小田原へ来て、天守閣を除いて見るべきものがないので小便をしてすぐ行ってしまおうということなのである。昔朝日新聞記者として渡辺氏と机を並べたことのある鈴木市長はひどい事を書いたものだと言った。

観光客を引きとめたいと思ったら、まず小田原自身の観光開発をやらなければならないのだが、それにはまだほとんど手がついていない。

歴史上の人物だけでも、源頼朝、曾我兄弟、北条早雲、豊臣秀吉、徳川家康、千利久、春日局、二宮尊徳、弓削道鏡、親鸞等子供でも知っている著名な人にゆかりのある史跡が散在している。これらの史跡をいかに顕彰し、紹介するかということも観光の面から重要なことになってくるが、それ以前に解決しなければならぬことに交通問題がある。

幹線道路の交通量の増大に伴って旧町内の交通渋滞はおびただしく、まったく身動きのできないほどの混雑振りを示している。これは小田原に残存する城下町的要素が大きな原因の一つになっていると考えられる。

今試みに江戸時代の絵図に現代図を重ねてみると、道路町並みの変化しているところは駅前

周辺の旧緑町地区だけで、その他の地区はびったり合わさって、ほとんど変っていない。城下町特有の丁字路もまだあちこちに残っており、道幅も震災後両側の商店がいくらかずつ出し合っ

て広がったのであるが、この広さでは現在の交通量に対応することとは到底できそうもない。したがって、交通規制も他都市に比べてはるかにきびしく、一方通行、右折禁止などが非常に多く

明治の初め小田原に來りし 英国海軍將校の談

関 重 忠

明治の初め小田原に小松屋と称せし西洋旅館あり。旧名欄干橋、すなわち今の十字一丁目外

郎氏宅の西隣、目下日本石油会社の所在場所にあり。白ペンキ塗りの木造にして、外国人の函

嶺に漫遊する者は横浜より馬車にて小田原に來り、同旅館に宿

泊又は休憩の後、駕籠或は徒歩にて登山せしなり。何しろその

線へ移って営業しているのは中心部に駐車場が極めて少ないためで、小田原はまさに動脈硬化症に陥っているといっている。

このことは市民のすでに感じているところで、小田原駅周辺地区まちづくり研究会などがあ

って、城と緑と都市魅力の創造を旨指して検討を重ね、最近意見を提出している。

これを要するに、小田原という都市はいろいろの特色を持っ

てはいるが、現在のところではまず交通都市としての性格を重

視すべきであらうと考えるのである。

(おわり)

小田原都市景観 懇談会の提言

小田原市は都市景観づくりを目的として、小田原市都市景観懇談会(市長の委嘱を受け各種団体、市民団体の代表二十一名で構成)を設けたが、その提言書が去る八月三十一日、座長の

坪井日大助教授より山橋市長に手渡された。提言の大別は次の通り。

市民意識(景観意識の向上。歴史的文化遗产に対する関心の醸成)、総合的まちづくり(景

観づくりの把え方・計画的進め方・行政体制のあり方・広域的景観の形成)、景観要素取扱い(自然景観との調和・街路景観・

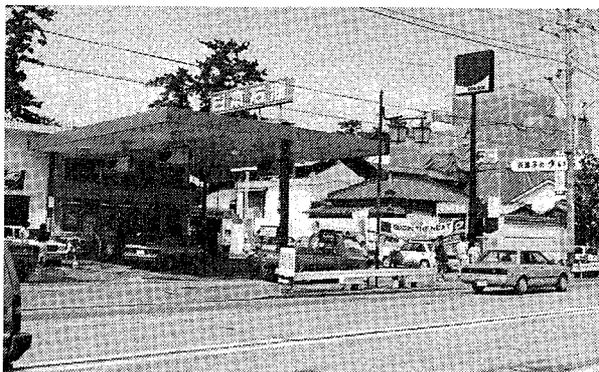
生活道路の整備と町並づくり・緑の保全活用育成・河川空間等の積極的活用)特定地区(丘陵部の保全・小田原城周辺・市街地内の空地、緑地と眺望を考慮した建築物・魅力ある街づくり

の工夫と景観阻害要素の排除)、公共施設(小田原城周辺の公衆トイレ・ベンチ・電話ボックス等のデザイン、橋のデザイン、コンクリート壁面等の活用)、その他(チャイムの音)

山せし事ありしが、其の途次小田原の旅館に休憩中、大勢の小供連が余の前に集り、唐人々と唱へたりしが、関も其の人なりしならん」と。余また一言もなかりし。凶らざりき、其の当時の腕白小僧が二十余年の後、唐人々と評されたる人に種々の指導に預りしとは。

同氏にして吾が小田原町今日の発展を見しならば、感慨実に無量なりしならん。

(昭和十四年一月発行『安恵我里』より再録)



明治の初め小松屋のあった場所

小田原地方の寺子屋(5)

— 足柄地方

庶民教育動向

高田 稔

- 一、庶民の読み書き能力(一三〇号)
- 二、寺子屋の登場(一二二号)
- 三、寺子屋とその他(一三三―一三三三号)
- 四、筆子と学習(本号)
- 五、寺子屋への就学率(本号)

四 筆子と学習

この足柄地方には筆子の入門帳が発見されていない。したがって寺子屋へ入学した筆子の年令、

修学期間などの実態を知ることができない。ここではまず

「明治四辛未年七月

手跡教師井門弟姓名取調査

相模国高座郡新田宿村新田一胤」

によってみることにする。これは神奈川県が明治四年(一八七三)県下の寺子屋の修学実態を知るため寺子屋師匠に提出させたものである。ちなみに足柄地方を管轄する足柄県では、このような調査は実施しなかったようである。

新田宿村は現在、相模原市域、新田一胤は当時筆子三十五名を擁していた寺子屋師匠であった。

ここでの入学年令、入学期並びに修業年数は次のとおりであった。○入学年令 七歳―一人、八歳―

きな幅があり

- 三十五歳―一人、二十歳―二人、十九歳―一人、十七歳―一人、十五歳―一人、十四歳―二人、十三歳―一人、十二歳―三人、十一歳―三人、十歳―一人、九歳―五人、八歳―三人、七歳―二人

となっている。

「身にあまる恩は七つの方にうけ」とうたわれたとおり、七歳ごろからの入学が一般的であったことが、これらの資料からも窺われる。なお、入学の上限が三十三歳や二十歳などの吉久保村の場合は余程特殊な稀な例であったと思われる。

入学の時期については、江戸では六月六日や二月初午(ちごま)が多かったが(『日本庶民教育史』)、神奈川県域では正月であったり(新田宿村)、二月、三月に集中(『関口日記』)し、四月以降は少なかったようである。修学年数は六、七年が多かった(『日本庶民教育史』)というが、前記の新田宿村の場合、大體似た傾向をしめしている。

なお、寺子屋の修学について注目されるのは、当時いわゆる通信教授が行なわれていたことである。

江戸・小石川の梅沢台陽の寺子屋がそれであった。台陽は清水家の家臣で、公務の傍ら内職同様に教えていたが、和様を善

くして能書の聞き高く、青蓮院宮直門であった。そのため遠くは小田原や静岡の豪商の子弟が、月に一度ぐらい上京し、或いは飛脚をもって手本を受けたり清書の修正を請うたりしたという。

(『日本庶民教育史』) さて、寺子屋での学習は何をどんな順序で進められたのであるか。まず城下町小田原での場合をみることにする。

明治六年六月、足柄県権令・

柏木忠俊宛に拝郷いのの「家塾開業願」が提出されている。(『明治小田原町誌』)

明治五年の学制頒布により公立の小学校が各地に設立されていったが、一方で従来の寺子屋もあらためて開業願を提出すれば、その継統が認められたのである。

拝郷いのの寺子屋「稚松学舎」も幕末期からの継統であった。

家塾開業願

一、家塾位置

第一大区区足柄県管下足柄下郡第一大区小一区下幸田 拝郷 武矩居宅、稚松学舎下唱

一、教員履歴

足柄県貫属士族拝郷武矩妻いの

当六月四十三歳八ヶ月

松尾陳介に従ひ天保七年正月より同十二年十二月迄都合六ヶ月

年習字研究

一、学科 習字

教則下等

八級 平仮名片仮名 西洋数字

七級 楷書国尽(注―日本の六十八か国を羅列したもの)

六級 模様尽(注―衣類の染色模様を記したもので、女子教科書)

手紙の文

五級 東海道往来(注―東海道の宿駅を順に教えたもの)

四級 隅田川往来(注―江戸の情趣・風俗を描いたもの)

三級 富士の麓(注―日本の沿革・地誌、文明開化の状況)

二級 右同断

一級 名頭(注―源・平・藤・橘に始まる人名を羅列)

各科温習

上等

八級 消息往来(注一書状・手紙に必要な語句を集めたもの)

七級 右同断

六級 小田原町尽(注一小田原の町名を羅列)

五級 世界商往来(注一正しくは「世界商売往来」海外貿易に必要な知識、諸外国の状況)

四級 右同断

三級 往来もの十二月帖之類(注一月から十二月に至る往復の書状)

二級 藻しほ草(注一正式には「横浜新報もしほ草」、慶応四年から明治三年まで発行された新聞)

一級 右同断

一、塾則

一、授業時間午前第八時より昇舎、午後十二時過舎之事

一、生徒上舎せは先教員に礼し出席簿江印すへし

一、毎年一月四日に開業、十二月二十八日休業

一、休業毎月一・六の日

右之通妻いの江家塾開業為仕度此段奉願候也

明治六年六月 当県貫属士族 拝郷武矩

足柄県権令柏木忠俊殿

この稚松学舎の教則は、学制頒布後であるから、当局から出された教則に一応準拠したところもみられるが、その教授内容は幕末期と大差はなかったと思われる。

この学習順序を整理し、図式化すると次のとおりになる。

(石川松太郎氏による)

平がな(いろは)、片かな(五十音)

数字

←

単語(人尽・模様尽・名頭・小田原町尽)

← 短句、短文集(手紙の文など)

← 韻文体の文章(東海道往来・隅田川往来・富士の麓など)

← 実用上の単語・文章(消息往来・世界商往来・もしほ草など)

すなわち、まず仮名・数字の練習からはじめ、国尽などによって漢字を修め、やがて東海道往来や富士の麓などによって文章を習って行った。

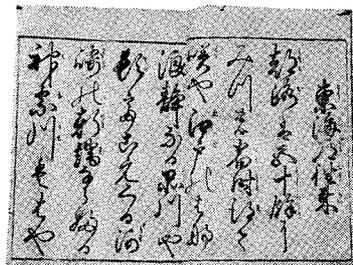
特に注目されるのは、小田原が東海道ぞいの重要な宿駅であったことである。

さて、農村の寺子屋はどうであったか。

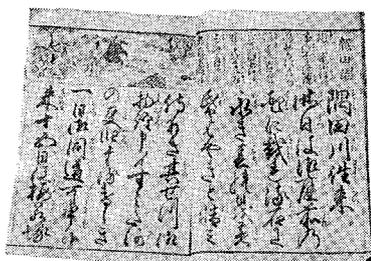
たことから、上級生に東海道往来を採用しているのは当然であるが、明治初年に及んだ寺子屋だけに、諸外国の状況を内容とする世界商往来、新聞「もしほ草」をとりあげて、国内外の新しい動静を知らしめようとしたことである。

以上のように、農民の子どもの場合でも、導入の段階は城下町のそれと差異はないが、その後は農村の生活や労働に密着した教材を採りあげて独自の教育課程が組まれたのである。

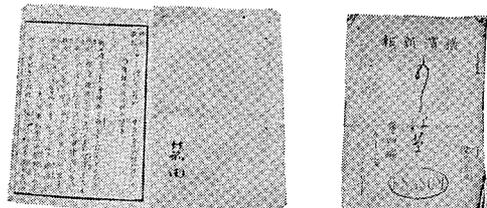
東海道往来



隅田川往来



もしほ草



智など)

以上のように、農民の子どもの場合でも、導入の段階は城下町のそれと差異はないが、その後は農村の生活や労働に密着した教材を採りあげて独自の教育課程が組まれたのである。

これらの教授法は、すべて素読(文字を声を立てて読む)と手習い(習字)とによって進められたのであった。

以上紹介した、城下町や農村で使用された教科書は、そのほとんどがいわゆる「往来物」として一括される。往来物とは、十一世紀平安末期に始まり、もともと進状・返状といった往復一対の手紙を収録した教科書であったが、近世になって初歩の教科書一般をしめす言葉として使われ、国尽・村名尽・名頭その他一切のものが往来物として取扱われている。

金子村の神官・円山師匠のもとでは次の順序であったという。(大井町教育史)

1 イロハ

2 名頭尽

3 苗字尽

4 村名尽(注一足柄上下郡の村名を羅列)

5 国尽

6 百姓往来(注一農業に必要な文字知識をのべたもの)

7 商売往来(注一商業に必要な文字知識をのべたもの)

8 千字文(注一自然・社会・道徳など四字づつ綴って千字に及ぶ、例えば天地日月、土農工商、仁義礼

智など)

この寺子屋で使用された初歩の教科書は、非常に種類が多く、今まで紹介したもの、外に足柄地方だけでも管見のかぎりでは三十五種類程に及んでいる。

寺子屋に学ぶ筆子たちは、この多様な往来物を手習いしたり素読したりする学習を身につけて、せまい郷土の子どもから生活圏をひろげて、国民のひとりとしての素地を培っていったのである。

五 寺子屋への就学率

最後に、足柄地方の寺子屋への就学率が幕末維新期において、どの程度に達していたか考察を加えたい。

これをたしかめる事は、今日においては全く困難であるが、推定はある程度可能である。

さきに紹介した当地方の寺小屋百二十五か所は、いうまでもなく享保から明治五年に至る約百五十年のあいだに開廃業したものの総計である。しかし、この百二十五か所は幕末維新期において最低維持された数値であるとみてさしつかえないであろう。

それは、ひとたび民衆の教育需要に答えて開業した寺子屋が何かの理由で廃業を余儀なくされても、それを継承するかたち

で新たな寺子屋の登場となるのは必至の事であろう。しかも時代の下るに従って教育需要は増大するから、その数を増して行くはずである。

また、(2)表(昭和六十三年一月発行一三二一)をみると、中井町では、近世をとおして山村の傾向がつよく社会経済的成長度が必ずしも高くなかったと思われるにもかかわらず、幕末維新期において戸数六百五十ほどで十か所の寺子屋が成立している。これは六十五戸に一つの寺子屋が開業したことによる。

二市八町のなかで、この中井町の開業状況に匹敵できるのはわずかに松田町と箱根町にすぎない。この中井町の開業率をもって全体を計算すると、百九十程の寺子屋があったことにな

る。これは決して現実ばなれした計算ではない。特に前にも指摘したごとく、十八世紀中ごろ五十年にわたる空白期は、ながい間に人々の記憶から薄れ、それを証する資料を全く失った結果ではなかったか。

したがって筆者は、幕末維新期における足柄地方の寺子屋数は、最小に見積って百二十、最大にみて二百と推定している。そして、そこに学ぶ筆子数を平均三十人(日本教育史資料その他による)とすると、百二十か所で三千六百人、二百か所では六千人である。

明治初期、足柄上・下地方の人口は各種の資料から推計して六万五千人、その学令人口率を二十パーセント(明治二七足柄

上下学令人口率)とすると、推定学令人口は一万三千人である。(注一寺子屋の就学年令と学制以降の学令はほぼ一致している)したがって、幕末維新期における寺子屋への就学率は、百二十か所では約二十八パーセント、二百か所では四十六パーセントとなる。

明治五年(一八三)の学制頒布によって以後、近代公教育が展開することになる。明治七年には全国平均就学率が三十一・三パーセント、小田原(駅)の推定就学率は三十九パーセントであった。

これに対し、この足柄地方の寺子屋就学率が、幕末維新期においてすでに最高四十六パーセントと推定されていることは、

明らかにこの足柄地方において、近代教育を受容する準備が整っていたことを示唆するものである。(おわり)

小田原城山の南ろくに草庵を結びて古稀庵と名づけて住める

山原 有朋
うちわたす相模の海を池にして あふぐ箱根は庭のつきやま

(明治四十年)
古稀庵庭園楓樹(十一月中旬残紅)
夜あらしに庭のみみじもちらされてけさは冬木の梢なりけり

(明治四十四年)

川柳

高井喜雄

売れてたら来ない歌手くる秋祭り

マツタケ飯老眼鏡をそっとかけ

公聴会反対意見の捨てどころ

空襲に代って地価でまた疎開

日米も日中日ソもみな摩擦

西相模の石造物(8)

大井町篠窪の道祖神

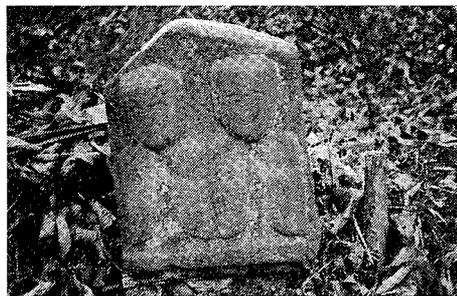
道祖祖で一番古い年号が記されたものは、秦野市戸川窠開戸にある、江戸初期の寛文九年(一六六九)のものだとされている。

長野県には戦国期の年号が刻まれたものが残っているが、後代再建の折、その年号が記されたものと見られている。

大井町篠窪のものは、寛文十一年の年号があり、五指に入る

古さのもの(いずれもが西相模にある)であるが、他の寛文期のものとは違った形状を持っている。普通、光背型とか舟型に分類される双体立像の合掌型であるのに、篠窪のものは駒型座像の合掌スタイルである。この種

のものは、私の知る限りでは、大井町金子馬場にあるが、ただし年号が不明。(岡部忠夫)



相州上曾我村瑞雲寺 開基争論記(一)

西山銚太郎

はじめに

私は子供の頃祖父から度々「昔、瑞雲寺と本多の間で大きい出入りがあった、最初は和尚の方に理があったが、和尚が位牌を削ってしまった許りに悪くなり、遂に編み笠一つで寺を追い出されてしまった」と云う話を聞かされた。その頃は「フーン、そんな事があったのかな」位の軽い気持ちで聞きながして居た。

然しこれは大変な事件だった

様で、当時の大人は皆よく知って居り、有名な話だったが然しそれ以上の事は、余り詳しくは知らない様だった。
瑞雲寺総代だった私は、寺に出入りする事が多く、住職と話す機会も多く寺の歴史にも興味を持った。『相州上曾我村瑞雲寺開基争論記』なる記録のある事を知り、これを読んでみようと思った。此の度一応読んでみよう。ここに記す事とした。



相州上曾我村瑞雲寺

開基争論記 全

本多八三郎御吟味願一件

文政十一年三月本多八三郎先祖豊前守開基相州上曾我村瑞雲寺寛高豊前守位牌破却致候一件申聞相札候処寛高儀不法の取計ニ付猶又家来差遣候処同人益我意申募候ニ付小日向総寧寺役僧江頼之書面如左
口上之覚

御支配下相州津久井功雲寺末寺同州上曾我村瑞雲寺儀者拙者先祖瑞雲院龍珠宗洞居士開基ニ而同所ニ罷在候処其後御當地江在府被 仰付候ニ付同苗寛左衛門与申者右村方ニ残置住居仕居候然ル処右瑞雲寺当任当春如何被相心得候哉先祖瑞雲院を開基之名目ニ立置候而者外壇中之者江

勸化相頼候差支ニ相成候ニ付位

牌破却茂可被致由寛左衛門江申聞候ニ付同人親類共一同右寺江罷越破却之儀御無用ニ被成下度且者同苗八三郎方江相聞候而者拙者茂茂相立不申併本堂ニ被差置邪魔ニ茂相成候ハ、自宅江引取可申旨折入而永談仕候処瑞雲寺被申候ニハ譬其方宅江位牌被引取候而茂開基之二字位牌ニ有之而者何分不都合位牌刃物ニ而破却之上寛左衛門江被相渡驚入右破却之位牌寛左衛門持掃リ其段拙者江為知来候ニ付不得止事瑞雲寺江両度迄使者差立開基位牌破却之始末相尋候得共外壇方之者共大勢集置理不尽之挨拶而已ニ而一向不取敢使者対面致被與候様申入候而茂使者ニ而ハ対面不致与被申断無余儀隣寺栢山村善来寺儀者本寺功雲寺役僧茂被相勸候由承候間使者右寺

江罷越前文之訳柄届置掃府仕候尤拙者儀事を好被是申立候儀ニ者無之候得共右始来御僧家不似合之被致方与奉存候間表向奉行所江も御伺可申心底ニ御座候得共御支配下之儀故可相成候ハ、是迄之通り先祖位牌立置事平穩ニ相治候様御役寺様之御威光を以御取計御頼申度此段使者を以奉頼候以上

月 本多八三郎使者

石川伊右衛門

右書面差出候処総寧寺役僧寛高呼出理解申聞候処左之通り返答書致彼是申紛且百姓又左衛門壇中惣代として腰押致候ニ付役僧宗措取被難致旨相断候尤過去帳取寄一覽被致候処龍珠宗洞之法名有之趣申聞候

相州上曾我村瑞雲寺寛高

并壇中惣代又左衛門より

差出書面写

乍恐以書付奉申上候

相州足柄上郡上曾我村瑞雲寺寛高奉申上候今般本多八三郎殿家来石川伊右衛門より拙僧江相懸當 御有利様江奉出訴候ニ付早々可罷出旨御差紙頂戴拜見恐入承知奉長候委細之始末左ニ奉申上候

一石川伊右衛門より申立候者先祖瑞雲院龍珠宗洞居士開基ニ





瑞雲寺本堂

而同所ニ罷在候処其後御當地江
在府被 仰付同苗覺左衛門与

申者村方江殘置然処瑞雲寺當春
中如何相心得候哉先祖瑞雲院ヲ
開基ニ立置候而者外檀中江勸化
相頼候差支エも相成右瑞雲院位
牌ヲ致破却候由覺左衛門江申聞
候ニ付同人親類共一同同寺へ罷
越破却之儀難成旨同苗八三郎方
江相聞候而茂拙者杯も相立不申
併本堂邪魔ニも相成候ハ、自宅
江引取可申旨申聞候処開基之二
字位牌ニ有之候而ハ何分不都合
迎刃物ニ而破却致シ覺左衛門江
被相渡右位牌同人持帰り其段拙
者江為相知候ニ付瑞雲寺江再應
使者差立位牌破却之始末相尋候
得共外檀方之者共集置理不致致
シ挨拶一向取敢不申使者ニ而應

對不相成旨申断候旨其外品、申
立候得共

此段當寺先住祖印住職之砌去文
政八四年十一月中燒失仕其後同
僧致隱居翌成年拙僧入院仕候処
今以本堂再建之企も無之依而檀
中一統江勸化相頼然処檀中百姓
覺左衛門儀申聞候者我等古来よ
り当寺開基檀徒ニ有之間其旨檀
中一同可相心得旨申候處檀中覺
左衛門申争罷成騒立候得共一体
右覺左衛門儀者身分有得ニ相替
候故朝右ニ誇外檀家もの相掠メ
平常村方不害何事ニ善惡之無差
別自分勝手依之儀耳申之村役人
之申聞をも不相用常ニ當寺開基
杯而申居候ニ付檀中一同より覺
左衛門江申聞候者往古より當寺
ニ而開基之檀中一切無之旨申聞
候処彼是無跡形も強情而已

申募候ニ付檀中ニ有共拙寺
江申来り候者過去帳等を取
調見度旨申出候ニ付伺其意
過去帳篇と相改候處開山開
關之年号者明應元子年有之
覺左衛門先祖龍珠宗洞居士
正保四年亥二月二日与古過
去帳ニ有之新過去帳ニ者天
正十五年亥四月二日与有之
明應年中より古過去帳ニ有
之正保年中迄九間六拾ヶ年
程を年数相隔隔同人石塔ニ
者法名花庭宗栄与切付有之
候得者檀中ニ有一同右之趣
拙僧江申聞候然処覺左衛門
先祖瑞雲院龍珠宗洞居士開

基杯与相違之儀申偽り候ニ付
覺左衛門同人弟鹿蔵江右之段及
懸合候処同人共儀當惑仕全心得
違之旨相弁然処亥ノ十月廿八日
夜深更ニ及右鹿蔵罷越拙僧江申
聞候ハ如何之所致有之候哉石塔
ニ花庭宗栄与切付有之候而者
何分ニも外檀中江對シ覺左衛門
鹿蔵とも相立難儀有之間極内、
ニ而為取替候儀達而相頼候得
共容易不相成義故敵敷相断候處
其俣婦宅仕候折柄理不尽ニ無名
之一心塔与引替置候ニ付難差
置其段敵敷懸合候処右両人申聞
候者江戸表ニ我等分家有之出府
之上當寺ニおゐて我等開基有無
之儀篤と取調參り度候之間湯村
迄石塔取替置候俣差置候様申
候得共拙寺檀中ニ而者江戸表檀
家之者壹人も無之石塔早速如元
致シ置候様申聞候処一向聞入不
申強而申募候ニ付左候得者出府
之上相糺取調可參旨申聞其後數
日相立候とも一向出府之儀も無
之間相待候處覺左衛門鹿蔵申聞
候者江戸表出府之儀も諸雜費高
も相懸迷惑ニ付外檀家之者差立
可呉杯法外之挨拶仕更ニ取敢不
申右様之次第ニ御座候得共本堂
再建勸化等甚難波仕候間外檀中
一統江及相談候処一同申聞候者
誰渠と申無儀位牌等を取調怪
敷法名有之候ハ、削度旨申候
得共、外檀中一統承引不仕當惑
仕候間右之趣覺左衛門并鹿蔵同
人親類共江及懸合候処同人共申

聞候者外檀中右之心底ニ有之候
ハ、削取呉候様相頼ニ付伺其意
削取其後當三月中何国侍ニ候哉
鹿蔵同々致シ拙僧江面会致度旨
ニ而拙僧江罷越候処其節拙僧病
氣ニ付引籠取コ罷在候間何様之
用向ニ而參候候哉之旨檀中ニ者
居合及承候處檀中ニ而者難成由
申聞候ニ付檀中より姓名承り候
得共一團不申聞不取留義而已申
居押而姓名承れ候處石川伊右衛
門と計申聞其俣鹿蔵同道立戻り
其後覺左衛門罷越削取候位牌我
等佛檀江備置度候間相渡可申旨
達而申候ニ付相渡候得共前書奉
申上候通強勢者ニ候間此上如何
様之儀ヲ目論ミ不法可及も難計
依て本寺江右之段御届候處拙僧
并ニ檀中ニ者覺左衛門鹿蔵共早
同道ニ而罷出可申様被申聞候
ニ付其段拙僧檀中より右両人方
へ為相知候處石川伊右衛門儀本
寺江罷出候儀差留候間我等共志
不參ニ付其旨可相心得候趣申断
候ニ付右始末當人本寺江申立候
処両人ニ者不參ニ付難相成旨被
申聞依而拙僧より村役人方江申
通候處漸罷越一同罷出候始末
逸被取調候上本寺ニ而申聞候
者本堂再建成就仕候迄者右一塔
之儀者本寺ニ而預候間右之趣
ニ而書付差出候様被申聞則檀中
并村役人隣寺一同書面差出一旦
中濟ニ相成候ニ付當時本堂再建
中ニ御座候處當 御有刹様より
御差紙頂戴拜見奉驚人候依て覺

文政十一年五月
相州足柄上郡上曾我村
瑞雲寺
寛 高 印
檀中惣代
又左衛門印
總寧寺
御役所
(つゞく)

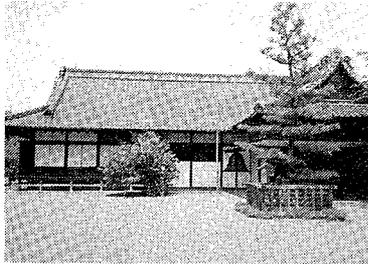
水戸、五浦 史跡めぐり寸描

山口 貢

昭和六十三年五月二十九日(日曜)午前七時、参加者三十二名はバスで小田原駅前を出発、第一目的地的水戸に向った。昨午校の頃、勿来の関を中心とした史跡めぐりを行う計画があったのだが、前会長中野敬次郎氏の神奈川文化賞受賞祝賀会、亦その後の中野氏の病氣、そしてご逝去で中止となったのを、このたび桜の時期を過ぎた実施となつた訳である。当初の計画は、中野先生の過ぐる日の、勿来の関の桜にまつわる華やかな文学的な思出があったらしく、従って今回の史跡めぐりは図らずも、追悼旅行の意味も含まれていた。

水戸城内コース

第一目的地的の水戸は千波湖を堀とする城内三の丸の弘道館と、天守閣がわりと言はれる三層楼を含む(従って本来は本丸に当る)好文亭で、水戸城の核心部である。又両者とも江戸後期の天保年間、烈公・徳川斉昭によって造られたもので、弘道館は藩政改革や海防充実等の文武修業の拠点、藩



弘道館



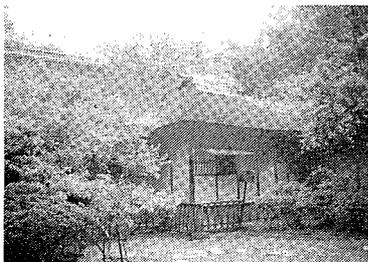
好文亭

校であり、借楽園はそれら修業の余暇の休養の場所等である。弘道館は三の丸堀の内側にある一八ヘクター、ルにも及ぶものであったが、幕末の天狗(勤皇)派と請生(佐幕)派との戦火で焼失し、残るは正門・正庁・弘子廟等である。なお後日知った事であったが、当時の激戦の跡を物語る弾丸が、正門の柱に残ると言う。知らずに見落してや、残念であった。

借楽園のうち好文亭は、天守閣代用なので周辺の構造を注意して歩いたが、駐車場から上の段への急斜面が墨壁である事、梅林から好文亭の段に上り、左の建物側に曲る手前で、梅林統きの右下の段との境に、土塁名残りの盛り上がりがある事に気が付いた程度であった。

借楽園のうちに奥御殿は、現代に入り焼失したものを正確に復元してあり、各皇族方ご来臨の跡でもある。楽寿楼との繋ぎの太鼓廊下の連子窓は、緊急防衛の際、弱点を強化するため、その内壁上部から蝶番装置で、原板が下せる構造にしている。しかも外壁の連子格子の隙間を目つぶしにするため、内外の板に別に連子格子が打ちつけてあり、内外が組み合うと外側表面が平滑と見えるよう仕掛けられていた。また三階楼に上る階段の途中には武者控の余地空間もある。これらの武装構造が重なって天守閣代用の説が生じたのだろう。なお三階から見える千波湖の遠景は美しい。その外、二階や廊下の屋根のクケラ葺や、その上にのる棟瓦との調和、一階廊下の障子(上・下は斜交の葺の簀子、中間の明り取りには、縦・横・斜交骨に紗張り)料理輸送用の四面格子で紙張りのエレベーター等、興味深く感ぜられた。帰途、茶室(何陋庵かろうあん)用路地に気が付き、萱葺屋根、簀子戸の門や、庇が深く、くぐって入るような感

西山荘



西山荘

じの腰掛け待合を、駆け足でのぞいて帰り、屋敷におよばれする。

西山荘
水戸の北、二十軒、常陸太田の西山荘は、水戸光圀、晩年の隠棲地で、光圀文書の署名に、西山隠居とある話は、小説によく見る。鬱蒼たる林、加うるに降雨直前の陰鬱な空なので、暗い印象があったが、晴天の日ならば涼しく爽やかな山であろう。家屋は、丸窓に突き上げ戸もあるが庶民的な萱葺き屋根である。庭の奥行きが狭く写真に適さないので止めにし、帰りの売店の写生画撮影で後日用の記録にした。空模様は気使いつつ行くと、果せるかなの大雷雨、大粒の雹まじりの雨で、豪雨というよりは、水の大きな塊りをぶち撒く荒天となり、観光客は一せいに駆足で売店に飛び込んだ。

野口雨情記念館



野口雨情記念館

次のコースが野口雨情遺跡なので天が雨情をもよおしたのだ。翌日のニュースは、農作物大被害を放送した。

雨情コース
北茨城市の歴史民俗資料館は、野口雨情の記念館を兼ねていて、見るべき物が何種類もあった。しかし雨情生家訪問予定のため、半数以上は早々に切り上げ、それに向う。

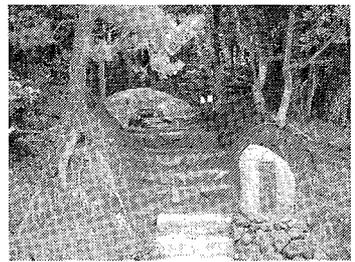
生家は民家ながら殿守造りに似た、この地方の家屋の中でも目立つ、低石垣に乗る建物で、表通りから奥まる位置にはあるが、右側の出櫓ふうに突き出た一棟、また本体の二階は、四方高欄つきであるので、一寸とした殿閣の印象がある。

案内を請うと出て来たお年寄りは、雨情のご子息で、血色は良いが相当の年輩に達した感じである。だが見かけとは異り記憶の定かな



方で、咄々の話し振りながら止る所を知らず、五分の予定が数倍となったので筆者は腰が浮いてしまい、写真撮影に切りかえ、ようやく外に出た頃、皆は出て来た。しかし雨情は最初に北海道に行き、啄木と交友があった事、東京に移り、弟子入り多く、断りかけた所先輩弟子が面倒を見るからと言ひ弟子が多くなった事、先輩弟子の努力をねぎらい、カフェーで酒を振るまつたから、こんなに嬉しい事はなると弟子達が感激した事、常磐炭鉱に石炭の買付けに来た中央商人達が、何日も居続けるので、芸者達の持ち歌が種ざれとなつてしまふので、その頼みに応じて雨情が炭坑節を作つた事など、どの話も甚だ興味深いものであった。

五浦(いづら)六角堂見
五浦は、時刻経過で入場締切
五浦海岸



岡倉天心の墓

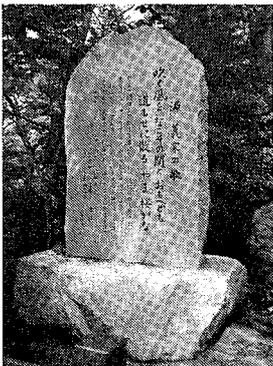
となつたので、翌朝、五浦観光ホテルの庭からの遠望写真で間に合せることにした。なお表通り添いにある岡倉天心の円墳は撮影出来た。

勿来の関
朝八時三〇分にホテル出発、一路、勿来(なこそ)の関へ、車中、委員方から関や八幡太郎義家の「吹く風を」の歌に因む史談を聞く。

五世紀頃、道興(みちのくに)の荒ぶる神々、蝦夷の南下を防ぐため、念珠関(ねずがせき、念種又は鼠とも、山形、新潟県境)や奥州街道、中通りの白河関(福島県白河市郊外の古関・大字旗宿)と共に設けられ(太政官府「類聚三代格」)に白河、菊多雨刻の設置は、今より四百余年云々と、奥羽三関(さんかん)と呼ばれた。その後、菊多の刻

は勿来の関と呼ばれるようになった。勿来には、蝦夷よ来る勿れとの意味があると言はれる。やがて大和政権の勢力拡大と共に、蝦夷の勢力は北方に追いつめられ、柵・関は北上したので従来の関は荒廃した。更に弘仁二年(八一二)、陸前浜街道のこの駅路は廃止され、奥州との交通は主として白河関経由となり、玄関口は勿来から白河に移動した。更に義家が此処を通つたとされる前九年の役頃(以前は一〇五四〜六二二、近年は一〇一〇〜)には、関は荒廃していた頃である。

白川の関は、平安期の歌
勿来の関



源義家の歌碑



勿来の関

僧、能因法師の「都をば霞と共に出でしかど、秋風ぞ吹く白川の関」の歌で有名になった。しかし実の所能因法師はこの歌を書斎で作つたものであったので、有名なものであつたので、有名なもの過ぎて、引込みが付かなくなつたので、人に隠れ日向ぼっこで日焼けしようも長期間の旅をしたように見せかけて、人前に出て来た。一方、勿来の関の歌は、実際に義家を作つたか否か不明だが、これで有名になつた、などを岡部委員から、また千載集、下

「吹く風を勿来の関と
思へども
道もせに散る 山ざくらかな」

証、特に「道も呉れたものだろうが、も少し優しくしておくれ。風に吹かれて舞う花びらが、道を狭くと散り敷かれるので、とても惜しくて通れない。(ああこれが「来る勿れなのか」)ぐらいいしか考えていなかつたので、余韻を引く、委員の方々のお話に心を引かれた。

山上の関跡では、バス停東地点の巨木群の枝振りに感嘆し、関道の上り坂では新旧歌碑群の多さに驚き、頂上に達すると新建築中のコンクリート。思はず開発かと目を怒らせると、何ん

話となり、苦戦となつた事、火攻めで衣川や厨川の柵を破つたなどの話をした所頼通から戦の事は別として、奥州は名所が多いので、どこか心に残る所があつたらうから話してほしい」と要望され、勿来の関の桜の風景を述べ、だれか心ある人に見せたいものだがと残念に思い、下手ながら歌一首の真似ごとをしたと「吹く風を」を詠じ、人前ではお話も出来ないほどだと述べたので、人々はその歌の佳さや、義家の優しい心根に感じ入つた」と内容をうる覚えに記憶する。従つてただ単純に「ああ春風が吹く。この風は都から、遠くはるばる来た私を、勿来の関がもてなして吹かせて呉れたものだろうが、も少し優しくしておくれ。風に吹かれて舞う花びらが、道を狭くと散り敷かれるので、とても惜しくて通れない。(ああこれが「来る勿れなのか」)ぐらいいしか考えていなかつたので、余韻を引く、委員の方々のお話に心を引かれた。

と史跡の歴史資料館だ。もう少し早く出来ていれば見られたものを」と、ころりと感情が交差してしまつた。

笠間稲荷
三大稲荷の一、笠間稲荷は六五〇年建立、十九世紀中葉に再建され、県の重文に指定されている。手洗の覆屋の彫刻の豪華さや、参道沿いの仲見世に目を配る。

西明寺
益子町西明寺は真言宗豊山派の寺。坂東三十三所の第二十番札所で、天平九年(七二二)の開山、正平六年(一二三二)兵火、再興。塔は十六世紀中葉の建立で、本堂、鐘楼等の指定文化財が多い。此処で交わっている事は、住職御夫妻が医師であるため、熟年、老年者が多い参詣客に急病人が出ても安心であると報道誌にも喧伝され、そのことが壁面にも張出されている。

益子焼
屋敷は益子焼窯元の二階でとり、食後、店内散策、普段なら何か買おうとキョロキョロするのだが、旅の最初の弘道館で笠間焼の氣に入つたものを買つたのと、さらに先日小田原の青木画廊で、小田原地方出身の益子焼作家吉川水城氏の作品展を見たばかりであった

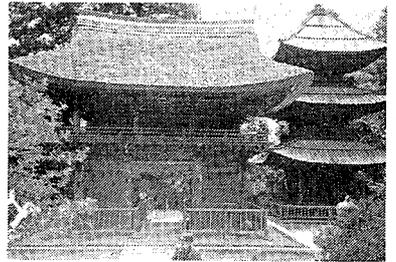
め、余り興味が湧かず、辰砂の皿を一枚買っただけであった。明の袖裏紅なら飾棚ものだが、此処では出来がよくても実用品であるので、青味の物を盛る漬物皿として求めた。

かくして二日間の旅行は無事に終り、流れ解散の途中下車を含め、七時過ぎに小田原に帰り着いた。委員の方々本当に御苦労様でした。

笠間稲荷



西明寺



郷土の地名

久野、町田

昭和十年代に足柄尋常高等小学校から『郷土教育提要』と題した騰写版刷のものが発行されている。石井富之助が苦心して収集されたものである。おそらく教師用として、全校教師が分担執筆作成されたものと思われるが、その中に「旧村名と新村名の由来」が記されているので、その一部を紹介しよう。

久野

足柄村誌に

「蓋シ本村ノ地域タル近里中最広ク北、西、南ニ四ツ尾嶺・明星ヶ岳・丸塚山・伊張山等アリテ古シヘハ人家ノ未ダ多カラヌ頃其峡間或ハ山腰山脚ノ名所ニ某野某原トヨベル原野ノ九所

(今諏訪ノ原・船ヶ原等ノ字アリ其遺名ナラン)ナルヲ以テ九野村ト称ヘシヨリ今ノ村名トナリニシヤ、或ハカカル山間ニ原野ノアルヨリ奥野トヨビシガ後現名トナレリトモ云ヘリ」とあるによりてその名称の由来を想像することが出来る。

町田(現小田原市寿町)

此の辺一円を芦子の里と

称えて本村願成寺の境内は

当村の鎮守神山神社神供田

の中部で神輿の渡御場である。

祭典の日には十八カ村

産土子が該地の四方になまこん

で神輿を待ち奉ったことか

ら待田と称えた。この村名

が町田の因って起った所以

である。



湯河原・城願寺のビヤクシン

真壁敏男 画

史談会旅行吟

和田登仙

好文亭にて
青柳の千波湖の波やわらかし
弘道館にて
尊皇の古文書の筆涼しけれ
西山荘
雹荒れて西山荘に竹騒ぐ
野口雨情生家
風薫る雨情の孫が今も住む
六角堂にて
大観や大海に浮く夏の月

湯河原方面史跡めぐり

剣持芳枝

七月二十四日(日)、梅雨のまだ明けやらぬ肌寒い

ような雨空のもと、史談会史蹟めぐりの一行は一路湯河原へと向った。駅前

の土肥実平夫妻の銅像の前で会長の挨拶を聞き、これから

向う土肥一族ゆかりの寺城願寺へ思いを馳せ、一同狭い坂道をゆっくりと歩を進

めた。山門をくぐると突如空を覆うような大木に目を

見張った。樹令八百年の天然記念物柏楨と知り、今更

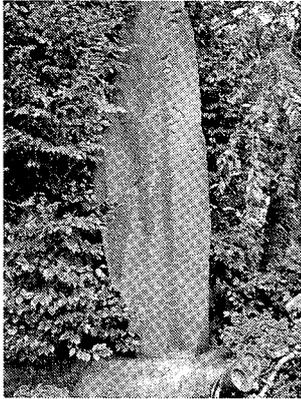
のように歴史の深さを痛感させられた。

寺の広間で先づ住職の本光豊師の挨拶があり、郷

土肥一族の墓



土肥一族の墓



万葉歌碑



万葉公園

へ案内された。屋敷の目も鮮やかな万葉弁当の美味しさに舌つづみを打ち、しばらくの間、俳人高田掬泉氏の万葉の歌の解説があり、思いはそぞろ万葉の世界に溶けこむような感じがした。雨もようやく上った午後万葉公園の散策へと向った。この万葉公園は昔は大倉公園と呼ばれていたが、昭和二十六年万葉学発祥千年を記念して万葉公園と改名され、万葉植物園として万葉植物が植栽された。散策道には万葉集の和歌を書いた立札が所々に立てられ、その都度歌を詠む声が其所此所で弾んでいた。

日頃の忙しさから開放されて何んと優雅なひとときであったろう。会館に戻り館内にある郷土資料室で、湯河原ゆかりの文学者の文書、縄文弥生時代の発掘出土品などを見学した。会館を出て最後の天野屋旅館へと歩いて行く。湯河原でも

一番古いとして一流の天野屋は本館と新館に別れ、本館のひと部屋で同館支配人の橋川氏の天野屋旅館にまつわるいろいろのお話を伺っている建物や、夏目漱石が執筆したという部屋、乃木将軍や東郷元帥が宿泊したという部屋もあり、全館純日本式の瀟灑なたたずまいに、一瞬明治の頃に戻ったような錯覚さえ感じた。

鉄筋数階建てのホテルの多い今の時代に、このような旅館がいまだに存在することは本当に嬉しいことである。旅館の方の御好意で今時珍らしい松のお風呂や、立派な屏風が印象的だった舞台付きの大広間なども見せていただき豊かな気分が旅館をあとにすることが出来た。

帰途、今日いち日の心に刻まれた感動が再び甦がえってきて、参加して本当によかったと思う次第である。

兵隊ごぼれ話

女官に捧銃

軍隊は敬礼が厳格だった事は誰もがよく知っていた。特に衛兵勤務で敬礼を誤る事は警戒心が足りないからだと言われた。

近衛師団の守衛隊は一寸敬礼がちがってた。陛下や宮殿下は当然ながら着剣捧銃で、その他軍旗・儀仗を附せられたる参内者、外国の大使・公使が親任状・解任状捧呈の為め参内の節、他勅使や御代拝等々夫々衛兵と歩哨の敬礼が定まっていた。軍人は如何なる高官、大臣大将でも一切敬礼しない。足を一寸引きつけて姿勢を正すと先方が挙手の答礼をして行った。

我々初年兵は二月中下旬に第一期の検閲を終り、第二期の教育に入る間の数日間守衛勤務の学科が行はれた。丁度我が中隊だけの編成で二重橋から宮殿一帯の担当、即ち正門儀仗衛兵に

勤務した。司令は大尉の中隊長、副司令将校二、衛舎掛下士官三、歩哨掛上等兵六、哨所は銃前哨を入れて七ヶ所四線交代の歩哨四十八名、喇叭手・衛生兵各一で司令以下六十二名、二装着用、将校は軍刀を持ち、衛兵所には小銃実包五箱七

千二百発を備えた物々しきだった。宮殿に北御車寄と呼ばれる女関があり、主として内親王・女王殿下が参内に多く使われた。我が内務班の教官が此の歩哨の警戒法について説明し、我々は熱心に聞いて居た。その最中に洋装で帽子を冠った(すばらしく美しい)婦人が車で出て来た。我が先輩のH氏は何の躊躇いもなくそのまま捧銃の敬礼をした。私は咄嗟にまづい事をしたな号がなく宮家の御紋章がついている筈だ。儀仗衛兵勤務者は無事任務を終って次の日の午前中帰隊した。

その夜である。昨日の勤務について色々話が出た。三重県出身の初年兵掛伊藤上等兵曰く、「おい、西山、女官に捧銃するにはどうするののかよく日に聞いておけよ」と。私は名差して云われたので困ってしまったが、私も人が悪い。「ハイ、西山はよく見えましたからよくりました」内務班では二年兵も中年兵も初年兵も大笑いをした。H氏怒る事も出来ずそのまゝ一件落着と相なった。(西山銈太郎)

落穂集

◎今年は暖冬に始まって春先の冬への逆戻り、長梅雨、冷夏といった異常気象に夏の終りを告げる「ひぐらし」がないのが八月上旬、庭の金柑は日照不足で落果多く、二番花が例年より多く咲いた。いつ平年並の気候に戻るやら◎景気変動の原

因に昔太陽黒点説という学説があったが現在はその説とは無関係、内需は確実に増大。そんな景気動向を毎日の折込広告を月別に数え、大まかながら見通しをして楽しんでいる人がいる。話によると一番顕著なのは求人情報の折込広告の由。求人情報社が三年前三社だったのが現在では六社。会社単独の求人広告と併せると

昨年比べて十五%増。折込広告全体でも十%強の増。業種別には消長があるも増加が目立つのが通信販売、出張販売、ローンの広告、減少しているのが不動産と

のが、今では広告折込機で「一まとめにする(同じ広告が二、三枚入ることがある)のもそのせいか?」。小田

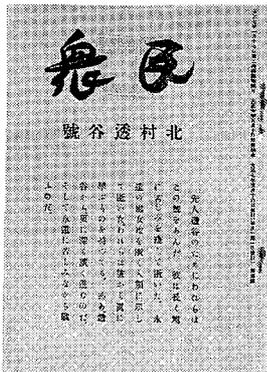
原の販売店で採用し始めたのは一昨六十一の三月からとのこと◎透谷の特集を組むため『北村透谷全集』(岩波書店刊)で彼の年譜を調べていたりミスを見え?とこちらも極めて些細なことだが一応挙げてみると、明治十一年九歳「父快蔵は足柄上郡々役所の上席書記となり、松田に通勤し始め

た。今回で連載完了の高田稔氏の「小田原地方の寺小屋」寺小屋が正しいのを編者が誤って寺小屋としてしまった。編者の不明をお詫びします。◎前号の史跡めぐり写真説明「福田正夫民衆碑」は単に「民衆碑」でよかった。碑には詩誌「民衆」創刊号福田正夫の発刊の辞が刻まれているの

特別賛助会員

- 智恵袋 相田酒造店
- 小田原銀座 アオキ画廊
- 足柄香粧株式会社
- 飛鳥屋
- 紳士服の **アメリカヤ**
- 画材 ガクブチ **ゆうえ**
- 伊勢治書店
- かまぼこ
- 株式会社 **江島**
- 株式会社 **小田原魚市場**
- ◎ **小田原ガス**
- 小田原信用金庫
- 小田原報徳自動車
- 株式会社 **オートセンター・スギヤマ**
- ◎ **小田原中央青果** 株式会社
- かまぼこ **籠**
- 令 **学** 苑
- 鐘紡株式会社小田原工場
- 力本ボウ化粧品鴨宮工場
- 興電社
- 清水甘納豆
- ★ **正榮堂**

- 鈴木 **廣木まほこ**
- 辰 **寿堂スポーツ**
- 大 **営不動産**
- 割烹 **おる海**
- ◇ **そびそ二宮**
- 茶半家具株式会社
- ちん **聖う本店**
- 角田 **ガクフ子店**
- 株式会社 **東華軒**
- 八 **小堂書**
- 八 **子マサ**
- 平 **井書**
- 富士写真フィルム **小田原工場**
- 株式会社 **報徳屋**
- ★ **松坂**
- 学生専科 **丸マルク**
- 食器の店 **マルサンストアー**
- 株式会社 **美濃屋吉兵衛商店**
- スーパーマーケット **ヤオヤク**
- 山 **口菓子舗**
- 湯浅電池 **小田原工場**



『民衆』北村透谷号
大正七年五月 第五号

で、福田正夫を冠するのは、必ずしも誤りでないにしても、『民衆』はイコール福田正夫でなく、『民衆』同人のものである。誤認を避けるため福田正夫を冠しないのがよかった。ご指摘を感謝いたします。◎西山銈太郎氏の「相州上曹我村瑞雲寺開基論記」は、国立公文書館に眠っていた古文書に始めて目の目を当てた貴重な資料。解説は西山氏の独力による。脱帽◎同じく西山氏の「女官に捧統」中「二装云々」は旧陸軍では軍服を一装、二装、三装の甲乙の四通りに分けた。一装は新品で戦場に赴く場合着用編者の体験では昭和十六年の「関特演」では二装迄しかなかった。◎隠岐威重氏「特異点」をこのほど自費出版。昭和十六年満鉄入社から二十二年引揚げまでの体験を綴った力作。ソ連兵士への対応など始めその他興味深い内容。(陶生)